

広島県立美術館

研究紀要

第25号

染織品の展示と方法について（2）

「令和3年度 秋の所蔵作品展 中央アジアの衣装と刺繍」の場合を中心に

..... 福田 浩子・岡地 智子 1

中央アジアの刺繍布スザニについて（2）

令和3年度スザニ刺繍ワークショップ報告 福田 浩子 19

広島県立美術館蔵《伊万里色絵花卉文輪花鉢》の来歴調査報告 岡地 智子 27

2 0 2 2

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.25

The way of preparation and exhibition of textiles in Hiroshima Prefectural Art Museum: mainly the case of “Central Asian Embroidery and Costumes: # Handicrafts of the Bride’s Stories 2, from Collection Exhibition 2021 Autumn”. 1

FUKUDA SIDDIQI, Hiroko & OKAJI, Satoko

On Suzani, the embroidery cloth from Central Asia (2): Interim report of suzani embroidery workshop 19

FUKUDA SIDDIQI, Hiroko

Research report on provenance of 《Foliate bowl with floral design in Kakiemon-style》 in the HPAM Collection. 27

OKAJI, Satoko

2022

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN



1. 刺繍布(スザニ) シャフリサブス 19世紀後半 木綿布・絹・羊毛
240.0×166.0cm 広島県立美術館蔵

(左) 全図

(右) 白枠部分のワークショップ課題部分の表と裏(デザイン1)



2. 刺繍布(スザニ) ヌラタ 19世紀後半 木綿布・絹
253.0×172.0cm 広島県立美術館蔵

(左) 全図

(右) 白枠部分のワークショップ課題部分の表2種(裏地がついているため裏写真なし)(デザイン3、2)



3. 刺繍布(スザニ) ブハラ
19世紀前半 木綿布・絹
244.0×190.0cm
広島県立美術館蔵

(左) 全図

(右) 白枠部分のワークショップ課題部分の表と裏(デザイン4)

中央アジアの刺繍布スザニについて（2）

令和3年度スザニ刺繍ワークショップ報告

福田 浩子

1 はじめに

2021（令和3）年度の秋の所蔵作品展の第4展示室で「中央アジアの衣装と刺繍 #乙嫁たちの仕事2」と題した展示時期にあわせ、2018（平成30）年度夏、2020（令和2）年度秋に続いて、今年度もスザニ刺繍ワークショップを行った。先のワークショップについてはすでにまとめたのでそれらの内容は省略し、今回のワークショップについてまとめておきたい。

今回のワークショップの目的は、①展示にあわせて中央アジアのスザニ刺繍を体験することで、より深い作品鑑賞を目指すこと、②館蔵品の一部を近似色の刺繍糸を用い、実寸大で再現刺繍して、スザニ刺繍への理解と技術を高めることとした。当館は新型コロナウイルス感染拡大防止のために数度にわたり臨時休館してきたため、急な休館とあってもワークショップを滞りなく行えるよう、初めて完全オンラインによる実施とした。参加費は無料、参加者に材料・道具を準備していただくこととした。

2 ワークショップの題材となったスザニについて

スザニの概要について再掲しておく。スザニは、ペルシア語で針という意味のスザン（سوزن）から派生した言葉で、刺繍または刺繍したものをそのように呼ぶ。現代でも様々な素材、様式のスザニを中央アジアの広い地域で見ることができる。スザニは主にウズベク人やタジク人によって制作され、女の子が小さいうちから一族の女性たちが分担して刺繍して準備が始められる。嫁入り時に数枚から十数枚ものスザニを持参する。壁掛けや掛け布、アーチ型のミヒラブを表したものは礼拝布として用いられる。

布は手織りの肩幅程度の本綿布や絹布、時にはウール布が使われてきたが、現代は本綿と絹の交織や化繊も使われる。中央アジアの刺繍の中には下絵を描かずに直接に刺していく刺繍も見られるが、スザニはインクで下絵を描いて刺繍する。下絵を描くのは、一族あるいはその地区のスザニ制作に経験豊富な者であった。現在でも誰でも下絵を描ける訳ではなく、工房でも特定のスタッフがボールペンやカーボン紙などで描く。下絵には色名を文字で書き、数本で構成されるような大きなスザニは一族の女性たちが分担して刺繍した。仕上げに刺繍し終わった数本の布を大きな一枚に縫い合わせ、場合によってはプリントの本綿布や絹の経緯布で裏地や縁取りをつけたり、全体をキルティングに仕立てたりして完成する。今日では、何本かの布を縫い合わせた大きな布や白地のままで仕立て上がった上着や製品に下絵を施してから刺繍することもある。スザニのデザインはブハラやサマルカンドなど都市や地域の名称をつけた様式名と呼ばれ、時代の変遷に伴って変化を見せてきたが、現代では伝統的なモチーフと併行して作家の個性を反映したデザインも現れている。

i 「中央アジアの刺繍布スザニについて（1） スザニに関する研究の中間報告および刺繍ワークショップ」『広島県立美術館研究紀要』第24号、広島県立美術館、2021年。

3 今回のワークショップについて

昨年までは、すべてまたは初回だけは美術館を会場としたが、zoomによる初めての完全オンライン実施としたため、回数を3回とし、図案等のpdfファイルをメール送付、布や刺繍糸等材料や道具は参加者が各自で手配、2回目と3回目には参加に進捗状況写真をメール送付していただいた。また、後述するようにgoogle formによるアンケートを2回行った。

今回の特徴は、その色彩と実寸大の2点である。当館蔵スザニは絹糸刺繍であるがスザニに使われるような絹糸は入手困難なため、手芸店で販売されている木綿の25番刺繍糸を使うこととし、500色以上を収録したDMC社の色見本帳と見比べて、なるべく近似する色を選んだ。その結果、予想外の色彩が使われていることに気づき、天然染料か化学染料か、天然染料とすれば何が使われているかを考えることができる。また、スザニの一部をハガキサイズを目安として、実寸大でデザインを起こし、今回の図案とした。このワークショップの課題を延長していけば、膨大な時間と手間と材料を要して、館蔵品と同じサイズのスザニに繋がることを体感し、想像していただきたい思いであった。つまり、一般的な刺繍教室とは性質を異にして、19世紀スザニの制作をほんのわずかながら追体験することを含んでいた。

以下、各段階について紹介する。

日程と内容

日程

2021年10月23日（土）、11月6日（土）、10月20日（土）の3回、各13:00-16:00で実施。

事前作業 デザイン選定と材料調達

google formアンケートを通じて、4種のデザインから参加者が1種を選択
選択したデザインの指示書pdfをメール送付。各自でプリントアウト。

1回目 刺繍ワークショップ1

布に下絵を描き、スザニ刺繍に使われるステッチで刺繍し始めた。かぎ針を使うステッチではなく、針を使うボスマとユルマを主に使用した（刺繍枠は使わない）。
（宿題：3回目までに各自にて刺繍を進める）

2回目 刺繍ワークショップ2

進み具合を確認して、必要に応じてアドバイス。疑問点を話し合った。刺繍以外の現地事情を写真や資料を使って解説した。

3回目 発表会

額装して、それぞれの作品をみなさんと鑑賞する予定であったが、一部の参加者は間に合わず。後日、完成写真を送付していただくこととした。終了後にgoogle formアンケート2回目。

会場

ウェブ会議アプリケーションzoom

素材・材料

- ・当館からの配布物（すべてpdfファイル）
- ・図案
- ・刺繍糸色番指示書
- ・課題作品の実寸大写真

参加者の準備物

- ・ 木綿布（生成り色30センチ角）
- ・ 25番刺繍糸（デザインにより色番指定）
- ・ 手縫い糸（額装時に使用）
- ・ 額（ポストカードサイズ）
- ・ 針（フランス刺繍針 7 番程度。糸が通れば普通の縫い針も可）
- ・ 鋏（糸切りバサミ等）
- ・ ボールペンまたはにじまないペン、フリクションも可
- ・ 物差し
- ・ ウェブ会議システムzoomに安定して接続できる環境（パソコンまたはタブレット推奨）とメールアドレス

デザインと刺し方

筆者が選定した 3 枚のスザニから、ハガキサイズ（100×148mm）を抜き出してデザインをおこし、近似色と同じ刺し方（ステッチ）により復元することを意識して、刺繍した。デザイン 4 種のうち、2 種は裏地がついていないため、裏を見ることでどのような順序で刺繍されたかを推測でき、刺し始めた場所や糸の渡し方といった完成状態を表から見ただけでは判別できないことにも思慮を巡らせたいと考えた。

使ったステッチは、

- ・ ブハラ・コーチング・ステッチ（ボスマ）：デザイン 2～4
- ・ チェーン・ステッチ（ユルマ）：デザイン 1～4
- ・ オープン・チェーン・ステッチ：デザイン 4

の 3 種類で、すべて針で刺した（ユルマは木枠に布を張り、かぎ針を使用して刺す場合もある）。

基本的な刺し方は、デザイン 1 のようにユルマのみで面を埋める場合はまず輪郭を刺してから中央を刺していく。デザイン 2 や 3 の花びら、デザイン 4 の周辺の葉などは、まずボスマで面を刺し、ユルマで輪郭を刺す。ボスマの渡した糸を留める短いステッチは段ごとにずらしてゆく、等といった考え方で刺し進める。

裏側を見ることで、玉結びして刺し始めていることや離れた部分を刺す時に糸を渡していること、色や場所毎の刺し順等に気づくことができた。zoom ミーティング中には、オープン・チェーン・ステッチの刺し方向が一律ではないと参加者から指摘が出て、針を刺す向きまで考えた。館蔵スザニを観察すれば 25 番何本どりといった糸ではなく、1 本の絹糸で刺してあるのだが、太さにして 25 番刺繍糸の 2～3 本どり程度のもので多く、今回は 2 本どりで刺していただいた。一方で、糸が細いために進みにくい方には 4 本どりで刺し進めることを提案（悪魔のささやき）する場面もあった。

4 参加者の作品と意見・感想

本ワークショップは定員を当初 8 名として募集したところ、受付開始時刻からすぐに申し込みが入り、欠席者もあったものの、結果的に 12 名で実施した。今後の参考のためにアンケート調査を実施前と実施後に行ったところ、自由記述型の設問には熱心な意見や感想がたくさん記入され、主催者側は



図1 デザイン1 (カラー図版1)

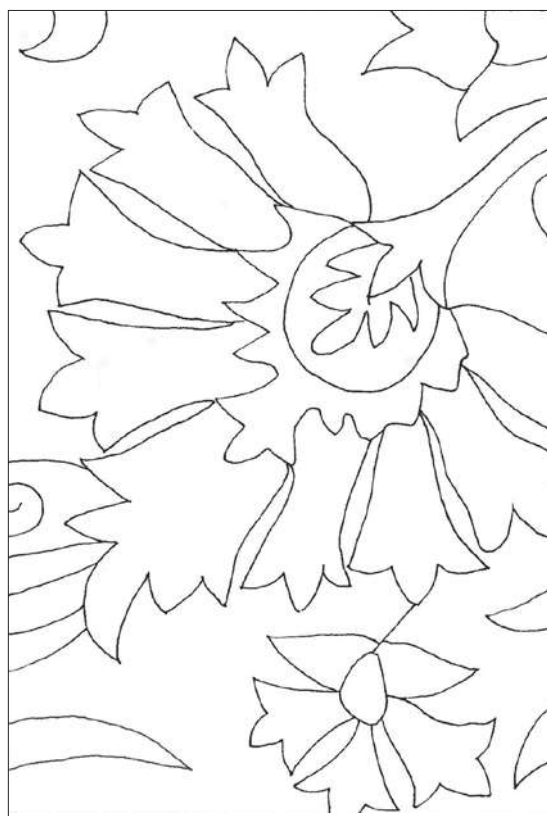


図2 デザイン2 (カラー図版2)



図3 デザイン3 (カラー図版2)

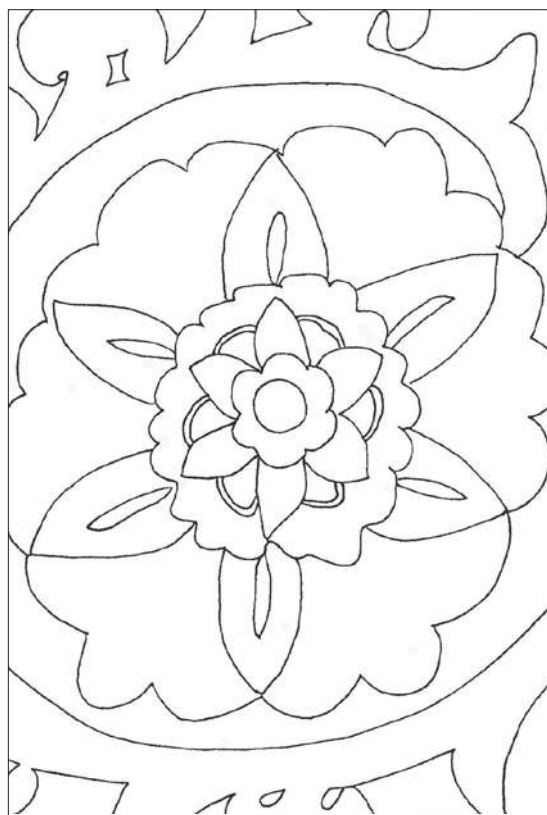


図4 デザイン4 (カラー図版3)

※図1～4は短辺10cm (140%) に拡大すればワークショップで使用した実寸大の図案となる。

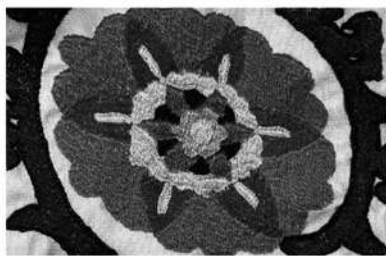
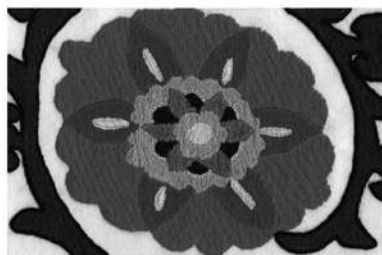
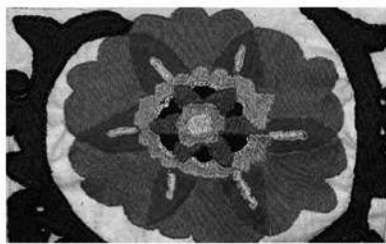
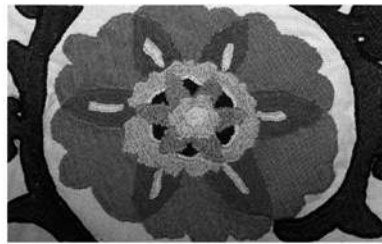
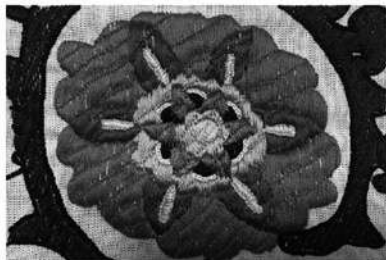
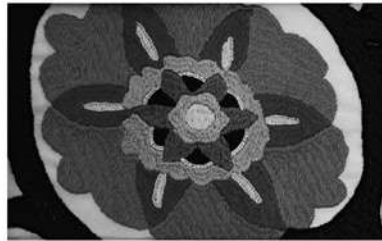
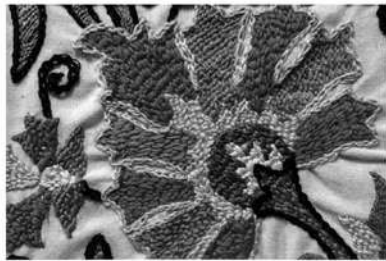


図5 ワークショップ参加者作品 最終送付写真
制作期間約1ヶ月。制作途中の作品には刺し順を見ることができる。

思わず胸を熱くすることとなった。

約1ヶ月の講座3回のうちに制作された作品をご紹介します。デザイン1を選択したのは結果的に欠席であったので参加者作品はなく、デザイン2は3名、デザイン3は2名、デザイン4は7名で、もっとも刺繍分量が多いデザインに人気集中した。デザイン4はとくにスザニらしいデザインだったと言えるのかもしれない。残念ながら諸事情によりワークショップ期間内に完成に至らなかった方もあったが、参加者の方々の力作をここに紹介する。刺繍完了後には、各自で準備した額に入れて飾ったり、別の小物に仕立てたりした。

ワークショップ参加の動機は、乙嫁語りの漫画



図6 デザイン1の参考作例



図7 額装した参加者作品

をきっかけに現地の文化や染織に興味を持った、地域を問わないzoomでのワークショップ、去年のワークショップ参加、過去のタシケント在住時に現地のスザニに感銘を受けた、日本刺繍経験者、ウズベキスタンに興味あり、スザニ（歴史やデザインなど）、染織にも興味、自身の制作の経験と知識の糧にしたい、刺繍の技術、スザニのステッチなど、多種多様であった。

また、今回のワークショップについての意見や感想としてもっとも多く聞かれたのは、講師を含む参加者同士の交流が楽しかったという感想であった。中央アジアの歴史や文化、刺繍、漫画の乙嫁語りといった共通の話題を持つ人たちと交流できた、他の参加者の方々の作品が勉強になったというもの。次いで、スザニの刺繍技法を学べたというもの。オンライン開催のため、とくに全国各地から参加があり、同好の士の間を提供することができたと思う。中には、「当時の方はどんな話をしながらスザニを作ったのか。小分けして作るスザニを繋ぎ合わせた時、歓声とか沸いたのかしらと思いながら縫うと、気持ちだけはウズベキスタンにいたことが出来ました」や「19世紀のブハラの方の技術の高さを日々感じながら、実際に手を動かして作ることで昔それを作った人たちに思いをはせることができ19世紀の乙女たちの色鮮やかな生活、一部だけでも体験できて楽しかった」と想像をふくらませた方々もあった。さらに、「母と広島県立美術館へスザニを見に行った際に母の才能が目覚め」た方があったのは想定外の結果でもあった。

さらに、今後のワークショップについての意見や希望は、中央アジアの染織品にかかわるワークショップ、小物制作、さらに難易度が高いものの制作、今回登場しなかったダブルチェーンステッチに挑戦したい、玉ねぎの皮を使って染色体験、糸や布、染料含めた再現制作、カード織り、ウズベキスタン以外の中央アジアの刺繍についても興味があるという参加者それぞれの制作意欲が見られた。次回開催への期待やスザニ講習教本、学芸員と接する機会がうれしいという意見が寄せられた。開催方式は自宅から参加できるという距離を克服できるという面でオンラインが圧倒的に支持された。今後の実施の参考としたい。

5 おわりに

本稿は、近年実施してきた中央アジアの刺繍布スザニに関するワークショップの続編の記録である。制作を追体験することによって作品やそれを作った人たち、ひいては背景となる歴史や文化への理解が深まると信じる。新型コロナの影響が長引き、現地訪問が難しい中で、メールやオンライン会議システムなどのデジタルの強みを生かした方法により、新しい取り組みに挑戦してみた。今後、さらに充実した活動を探っていききたい。

謝辞

熱心なワークショップ参加者の方々をはじめ、ウズベキスタン各地での工房見学、刺繍技法、素材調達、通訳ガイド等、多岐に渡るご協力をしてくださった方々等、心より感謝申し上げます。また、本研究、ワークショップは、2018年度公益財団法人ポーラ美術振興財団調査研究助成、および、2019年度公益財団法人三島海雲記念財団学術研究奨励金（人文科学部門、個人研究）を受けて行った研究の延長線上にあるものです。ここに記して深く感謝の意を表します。

写真

カラー全図すべて：オーシマ・スタジオ

カラー部分すべて、図6：福田浩子

図5、7：ワークショップ参加者から提供

作図

図1-4：福田浩子

（ふくだひろこ／広島県立美術館学芸課長）